

---

# 噂話

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

噂話

### 【Nコード】

N7777C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

とある噂話を学校で聞いた靖。それを早速実行に移してみると何ということか。高校生の恋愛です。最後にどんでん返しがあります。

## 第一章

### 噂話

ある高校の近くにある上坂公園には一つ噂がある。それは有り触れていると言えは有り触れているがそれでもある人達にとっては聞き捨てならない噂であった。

「そんな噂があったのか!？」

そのある高校の生徒の一人である上西靖はその噂をクラスメイトから聞いて思わず驚きの声をあげた。目が細く鼻が透き通った感じで髪を少し茶色にした細い少年である。背は普通で可愛いと言えば可愛い顔をしている。

「ああ、知らなかったみたいだな」

「初耳だよ」

詰襟の制服で身を包んだ身体を窓に寄せて友人に応える。目をくるくると動かさせていた。

「そんな話があったなんてな」

「噂は噂だけれどな」

その友人は彼にこう述べた。あらかじめ断るかのよう。

「そうらしいぜ」

「それ知ってる奴いるかな」

「いや、そんなに」

彼は靖の問いに首を横に振って応える。靖はそれを聞いてその目をまばたきさせた。

「あまりいないのか」

「ああ、俺も昨日はじめて聞いた」

また靖に述べる。

「そんな噂があることもな」

「ふうん、あまり知らないんだ」

靖はそれを聞いて教室の天井を見上げた。そこを見ながら考える

顔をしていた。

「あまりね」

「そうか、じゃあいいな」

「いいなって何がだ？」

「あっ、いや何も」

友人に問われて顔を下にやって慌てて応える。目が白黒としていた。

「ただ気になってね」

「まあ噂だしな」

彼は前以ってといった感じで靖に述べる。悪い話をしていないといった感じだがやや曖昧なのは噂でしかなかったからだろうか。首を少し右に傾けている。

「本当に」

「よし、だったら」

「だったら!？」

「あっ、何でもないから」

「怪しく思えてきたぞ」

友人はいぶかしむ顔で彼に言葉を向けてきた。靖はそんな彼に対して目をかなり泳がせた。目を見ればかなり狼狽しているのがわかるが友人は特にこれといって言わなかった。

「随分な」

「そうかな」

「まあいいか。そういう噂があるんだ」

「わかったよ。じゃあ覚えておくよ」

その言葉に応える。応えて頷いていた。

「面白そうだし」

「ただ、実際にやったって話は聞かないな」

友人は少し考えてから言った。靖はそんな彼をじっと見ている。

「この噂だって最近みたいだからな」

「最近なんだ」

「ああ、実際のところどうなのかはわからないな」

彼は目を左右に少し揺らしている。そのうえで靖に述べている。

靖はそんな彼をじっと見ているが同時に何かを考えているといった感じの顔であった。

「それにあれだぜ」

「あれ？」

「こういう話って何処にでもあるよな」

また靖に言うのだった。いささか保険めいた言葉に聞こえるのは気のせいであろうか。

「学園の七不思議とかと同じでな」

「まあ大体はそうだね」

靖は彼の言葉に頷く。言われてみれば似ている。怪談にしろ噂話にしろ大体において根元は同じなのである。だから彼も頷いたのである。

そのうえで話を聞いている。話す彼は靖の顔には気付いてはいなかった。

「やってみようっていう奴もいるかもな」

「そうだろうね」

その言葉に頷く。頷いてからまた言う。

「こういう話は」

「御前はどうなんだよ」

彼は今度は靖に話を聞いてきた。特に目の表情を変えるわけではなくただ靖の話を聞いているだけであった。やはり彼の考えは読んではいなかった。

「やってみようとは思わないのか？」

「いや、別に」

本心を隠して言う。しれっとした芝居であった。

「相手もいないし」

「そうだよな、まあやってみる状況ならばやってみたらいいさ」

「わかったよ、そういう状況ならね」

「ああ」

そんなやり取りを教室でした。その時はそのまま終わった。しかし話はまだ続くのであった。

学校が終わってからそこに行ってみる。見れば静かな場所ではない話があるとはあまり思えないような、そうした場所である。靖はそこを見て思った。

「やってみようかな」

教室ではああは言ったが実は思うところがあるのだ。それをしてみようと思った。それで実際に仕掛けるのであった。

## 第二章

次の日の放課後。靖は隣のクラスの北川奈緒子と一緒にいた。黒く少し茶色がかったロングヘアに白く大人びた顔立ちで気の強そうな目と小さな鼻を持っている。背はあまり高くないがスタイルとその気の強そうな顔から高く見える。制服を上品に着こなしている。

靖はその奈緒子に頼み込んでここまで来ていた。奈緒子はそんな彼に対して言うのであった。硬質で冷たい響きのする落ち着いた声であった。

「何でここに來たの？」

「うん、実はね」

少し照れ臭そうな顔で奈緒子に言う。

「この展望台にね。いいものがあつて」

「いいものって？」

目だけを靖に向けて問う。やはり冷たい印象だ。

「この公園よね」

「そうだよ」

靖は答える。二人が今来ているのは学校のすぐ側の公園である。街全体が見える展望台が有名である。そこから見える風景がかなり奇麗なのだ。

「展望台に行かない？」

「駄目だって言ったら？」

「えっ」

奈緒子のその言葉には思わず言葉を詰まらせる。彼女の言葉の冷たさが彼を金縛りにしてしまった。それだけの力を持つ言葉であった。

「駄目だって言ったらどうするの？」

「それはちょっと」

返答に窮する。奈緒子はそんな彼をじっと見る。彼は目を泳がせ

るだけだった。公園の緑の木々が目に入る。しかしそれは目に入るだけで心に入りはしなかった。

「ええと」

「別にいいわよ」

ところが奈緒子は急に心変わりしたようにこう言ってきた。

「私もあの展望台好きだし」

「そうなんだ」

意外といった顔で応える。奈緒子はそんな彼にさらに言う。

「行きましよう」

そして自分から声をかける。何か彼女の方が乗り気なのではと思える程であった。

靖はそのまま引き摺られるようにしてついて行く。展望台は緑に囲まれ下に街が広がっている。中央に噴水が置かれ赤いレンガが敷かれている。そうした場所であった。

下に見える街だけでなく海も見えている。青い海と様々な色の街が実に対象的である。それを見ていると風景に魅入られそうになる。二人は並んでその街を見ていた。

「今日は海が奇麗ね」

「そうだね」

靖は奈緒子の言葉に頷く。海は何処までも青く澄んでいてサファリアを思わせる。二人は今それを一緒に見ていた。そうして話をしていた。

「季節が違うけれど泳いでみたいね」

「泳げたのね」

「うん」

奈緒子の言葉ににこりと頷く。

「泳ぎは得意なんだよ、実は」

「それは知らなかったわ」

奈緒子にはにこりともせず靖に応える。しかし相変わらずその顔は笑いもせずクールなままであった。



「私も泳ぐのは好きよ」

「あれ、そうだったの」

「小学校の時はスイミングスクールだったのよ」

やはり静かな顔で述べる。そうして靖の顔を見ていた。

「今はバスケット部だけれどね」

「ふうん」

「今でも泳ぐのは好きだけれどね」

「海ではどうなの？」

靖はその言葉に問い返す。問い返すとすぐに返事が来た。

「好きよ」

クールなままの言葉であった。表情もそうであった。

「今もね」

「夏とか海水浴行くといいよね」

「そうね。ところで」

奈緒子は話を変えてきた。ちらりと彼の顔を見てきた。

「どうして私とここに来たのかしら」

「えっ」

ぶしつけな問いに言葉を失う。

「今何て？」

「どうしてここに来たのかしら。しかも二人で」

「いや、ただ一緒に見たかったから」

かなり下手な嘘をつく。奈緒子の冷たい目が心に突き刺さるのであった。

「それじゃあ駄目かな」

「それが本当の理由ならね」

やはり冷たい声であった。靖に顔を向けているがその顔も同じである。

「別にいいのだけれど」

「だから二人で見たかったからだよ、いや本当に」

「そうかしら」

やはり冷たい声で声をかける。

「確かに理由の半分はそうね」

「半分って」

「噂は聞いているわよ、私だってね」

「えっ、まさか」

奈緒子のその言葉に身体が固まった。全てを見透こすような目が突き刺さるのを感じて靖は動きを止めるのであった。呆然とさえしていた。

### 第三章

「そのまさかよ」

「知っていたんだ、君も」

「ここで相手に告白したら絶対に相手に頷いてもらえる。そうよね」  
「まさか君まで」

実は噂とは告白に関することだったのだ。好きな相手と二人での展望台に行って告白するとその想いが必ず適う。それが噂だったのである。

「まさかとは思ったけれどね。言われた時には」

彼から目線を外して海を見てきた。澄んだ瞳が海を見ているがその目は夜ならば月明かりと見間違うばかりの美しさを保っていた。

「正直驚いたわよ」

「あの、その」

「言うのよね」

海を見たまま彼に問う。

「告白。そうなんでしょ？」

「いや、それはその」

「もう隠しても無駄よ」

靖の逃げ道を塞いできた。さりげなくきつい奈緒子であった。

「ここに来た時点でわかってるんだから」

「あ、あのさ。それじゃあ」

戸惑いながら彼女に言う。

「駄目かな。よかったら僕と付き合ってもらえないかな」

「あまり格好よくない言葉ね」

やはり海を見たままそう返す。

「もうちょっとムードがある言葉じゃないとね。他の女の子は振り向かないわよ」

「えっ!？」

ここでとんでもないことに気付いた。奈緒子は今『他の女の子は振り向かない』と言ったのだ。そこには自分は含まれないとまでだ。「今何て言ったのかな、その」

「だから。言ったじゃない」

大きく溜息をついて靖に身体を向けてきた。すうつと一陣の風が吹いてそれに髪をたなびかせながらその白く整った顔を彼に見せてきていた。

「他の女の子はって。わかる？」

「わかるも何も」

今の奈緒子の言葉に啞然とする。目を丸くさせてぱちくりとさせながらの言葉であった。

「あの、それじゃあ」

「噂知ってたって言ったわよね」

見れば何か怒ったような顔になっている。実は奈緒子はあまり学校の男達からはあまり人気がないのだ。奇麗な顔をしているが冷たく近寄り難い雰囲気だからだ。付き合い易いタイプではないとされている。

「う、うん」

「そのうえで私はここに来たのよ」  
そう述べてきた。

「わかるわよね。ここまで言ったら」

「じゃあいいんだ」

「いいわ」

にこりと微笑んできた。優しい顔だった。

「これから宜しくね。上西君」

「うん、北川さん」

二人は名前を呼び合う。何か完全に奈緒子に手玉に取られた感じだったがそれでも靖は見事噂通りに告白を成功させたのだった。

こうして靖は奈緒子と付き合うことになった。ところが。

奈緒子は靖とはじめてのデートの前に待ち合わせ場所で誰かと

話をしていた。相手は女友達である。

『上手くいったみたいね』

「ええ」

奈緒子はその彼女に笑顔で応えていた。そのロングヘアを奇麗に揃えて黒いズボンで決めている。スタイルがいいのでズボンがやけに似合っていた。

「彼、完全に噂信じてるみたい」

『そうでしょ？これって案外いいのよ』

「まさか上西君も自分の友人の彼女があんたなんて思わないでしょうね」

『知っててもわからないわよ』

電話の向こうの彼女は笑って奈緒子に言う。

『私とその噂を彼に言ったなんてね』

「その噂が作られたことも」

『わかる筈ないわよ』

「そうそう」

奈緒子は笑顔で待ち合わせ場所の煉瓦の上に腰掛けている。そうして周りにまだ靖が来ていないのを確かめながら電話をしていた。

「その噂が実は作り話だってことも」

『わかる筈がないわ』

そういうことなのであった。全ては二人が仕組んだ作られた噂だったのだ。奈緒子の女友達が彼氏に噂を話して彼はそれを靖に話す。それを聞いた靖は奈緒子に告白する、そういうことなのだった。

『けれどさ』

ここで電話の向こうの友人は言ってきた。

「何？」

『回りくどいことしたわね、随分』

彼女はこう電話の向こうから言ってきた。

『素直に自分から言えばよかったのに。またどうしてこんなふうにしたのよ』

「だって。あれじゃない」

奈緒子はそれに応えて少し楽しそうな笑みを浮かべてきた。電話から見える筈がないがそれでも声にもそうした笑みが出てきていた。  
『あれって?』

「こういうのは彼の方から言わせるに限るじゃない。そうでしょ?」  
『聞き出すってこと?』

「少し違うわ」

それは否定してきた。どうやら考えることは案外深いもののようなのである。

「だって。恥ずかしいし」

『それだけ?』

案外繊細なようである。それが今彼女の顔にも出ていた。

「いいえ、もう一つあるわ」

『何よ、それ。よかったら教えて』

「やっぱり嬉しいじゃない。好きな子に告白されると。そうじゃない?」

のろけた顔と声になっていた。実はこれが素颜なのかも知れない。

「でしょ? やっぱり」

『まあそうだけれど。それにしても周りくどかったわね』

「それだけの価値はあるの。あっ、来たわ」

ここでふと気付いた。靖の姿が見えたのだ。

「それじゃあね。これからだから」

『頑張りなさいよ、折角色々やってここまでこぎつけたんだから』  
「わかってるわ、絶対に離さないんだから」

そう言って電話を切った。そうして立ち上がって靖に顔を向けてきた。

「おはよう、上西君」

普段の冷静な顔で挨拶をする。しかしそれは仮面である。仮面の下の素顔は決して見せはしない。噂話もまた謎のままであった。全ては彼女の心の中だけにあるものだった。

噂話

完

2007.4.14

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7777c/>

---

噂話

2010年10月8日15時44分発行